

備る

Vol. 80

日本「工芸」立国論

妹尾堅一郎

日本の特徴は「工芸」にある。工、すなわちテクノロジーと、芸、すなわちアート。現在、日本が誇る、相対的に豊富な資源は、科学技術と文化芸術であり、この二つこそが日本の繁栄と世界貢献の源になりえるだろう。科学技術は普遍性（ユニバーサリティ）を持ち、一国で生まれたとしても必ず何らかの形でグローバルに通用する。他方、文化芸術は国や民族による特殊性（ユニークネス）を持つが、それ故、世界文化に多様性という貢献をもたらすであろう。

「科学技術立国」と「文化芸術立国」は対をなす。また、「知財立国」と「観光立国」は両者をカバーする。知財立国

は、テクノロジーという知（産業財産権で保護する）とアート／コンテンツという知（著作権で保護をする）の両輪を必要とする。観光立国は、自然景観、温泉、寺社仏閣等の歴史的建造物、美術品や伝統的工芸品といった有形資産から芝居・舞踊や祭りや料理といった無形資産に至るまで、その土地固有の「歴史的・文化的価値」や「地理的・自然的価値」を味わうことが主とはいえ、風光明媚な景観や故事来歴のある建造物の「物見遊山」だけが「観光」ではない。京浜工業地帯の先端工場の夜間のクルーズ見学から、秋葉原電気街における先端IT機器等のショッピングまでも「観光」に含め

られるのである。

技術を具体化する工学と、文化を具現化する芸術の両者が重なり合うところに、「工芸」の世界が表出する。高度な工芸が可能な国は、英仏伊独日である。これらの国には、町工場の中小企業群が街を形成しているという共通点がある。

工と芸の交わるところで活躍するのは「アルチザン」である。それは山下達郎が手塚治虫に捧げたオマージュが一曲目のCDアルバム「題名となつた」。

また、「工」のハイテクノロジーの世界では、技術を評価する「目利き」が求められる。他方、「芸」のハイセンスの世界では「見巧者」が重要だ。「見巧



せのお けんいちろう

東京大学 知的資産経営総括寄付講座 特任教授
特定非営利活動法人 産学連携推進機構 理事長
1954年東京都生まれ。
慶應義塾大学経済学部卒業後、富士写真フイルム入社。
英国国立ランカスター大学経営大学院システム・
情報経営学博士課程満期退学。1992年より産業能率大学、
慶應義塾大学で教鞭を執る。2002年より東京大学先端科学
技術研究センター特任教授などを経て、2008年より現職。
内閣知的財産戦略本部「知的財産による競争力・
国際標準化専門調査会」会長、経済産業省
「産業構造審議会産業競争力部会」委員などを歴任。
近著に「技術力で勝る日本が、なぜ事業で負けるのか！
（ダイヤモンド社）」「アキバをプロデュース 再開発プロジェクト
5年間の軌跡」(アスキー新書)ほか。

者」とは、古典芸能の世界でいう一種の「通」のこと、例えば歌舞伎で「音羽屋」と声を掛けることができるのは彼らである。美術から文学まで、古典芸能からポップスまで、そのレベルを上げるには、適切な評価がくだせる、芸に精通した「見巧者」が不可欠なのである。

創る側は、見る側・使う側によって育てられる。工と芸、その目利きと見巧者の集まる街。それが東京の秋葉原である。私はロボットとフィギュアの街と呼んでいる。前者がハイテクの、後者がサバカルチャーの象徴であることは言うまでもない。アキバの再開発が日本にとって極めて重要なのは、そのためである。創